攤五郷における酒蔵建築の変容 酒造空間研究 その1

 攤五鄉
 酒造空間
 酒蔵

 酒造技術
 和風
 観光

正会員 ○東野 友信* 同 木下 光** 同 丸茂 弘幸** 同 前谷 吉伸***

1. はじめに

兵庫県・灘五郷では、地域風土に根ざした伝統的木造 酒蔵が近年まで受け継がれてきたが、1995年に起こった 阪神大震災によりほとんどの伝統的木造酒蔵を消失する。 しかしこれらは、酒造の中核の施設としてではなく貯蔵 庫や倉庫として利用されていた。⁽¹⁾つまり酒造技術の変化 および規模の拡大により、酒蔵本来としての役割を失い かけていた可能性が指摘できる。そこで本稿では、協力 を得られた灘五郷の酒造会社 15社 19蔵への調査をもと に、酒蔵の変容実態とその要因を明らかにする。

2. 伝統的木造酒蔵の特性

伝統的木造酒蔵は「重ね蔵」と呼ばれ、その配置は北側に大蔵を配置し、南側に前蔵を連ねるものであった。冬季には大蔵に北側から六甲おろしが吹き付けるので窓の開閉によって温度管理を行い、また二棟を重ねることで夏期には南からの日差しを前蔵が遮り、大蔵に貯蔵された酒の腐敗を防ぐ機能を果たしていた。



写真-1 重ね蔵

伝統的木造酒蔵は、冬季の百日間で千石造りを実現するため千石蔵とも呼ばれた。酒蔵によって生産量に加え、蔵人数、道具数も決められており、千石蔵が一つの単位であった。さらに蔵前と呼ばれる桶や樽などの干場が設けられていた。そして酒造家の住宅が併設されていたほか、蔵人のための会所と呼ばれる生活の場所が用意され、生産施設としてだけではなく共同生活の場であった。

3. 酒造技術の変革

①四季醸造の成立; 1950 年頃から高度成長期に合わせて 需要の高まりと共に蔵人の不足、老齢化が目立ち、四季 醸造の気運が起こり、すなわち年間を通した醸造が行わ れるようになる。現在では小規模がゆえに 4 社は依然冬 季醸造を行うが、10 社は冬季に寒気を取り込むといった 伝統的木造酒蔵に見られた温度管理ではなく、設備機器 による人工的な温度管理で四季醸造を行っている。

②工程の機械化;戦前までは原料の運搬を含む全ての酒造工程においてほぼ手作業で行われていたが、1956年の蒸米放冷機の登場を契機に、各工程が急速に機械化へと変わってきた。1963年自動製麹機、1966年自動圧搾機、連続蒸米機が考案された。(図-1)これら工程の機械化により人と空間を膨大に必要としていた各作業は省力化、省スペース化された。この面積効率の高まりによって、

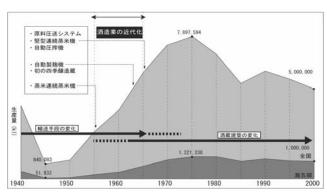


図-1 技術革新の時期と生産数量の推移

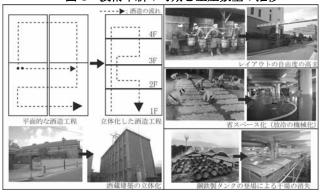


図-2 面積効率の高まり

以前必要であった膨大な放冷場、酒母場が、現在は余剰空間となっている。(図-2)

③工程間の運搬手段の機械化;人が担いでいた原料や水の運搬では、1970年頃にエアシューターが考案された。 各工程の機械化から約 10年を経て工程間の運搬手段の機械化も整い、酒造技術の革新は一応の終止符をうつ。(図-1)運搬手段の機械化により、洗米や圧搾の工程の一部が別の場所で行われるなど、道路をまたぐパイプで原料を圧送させるなど、工程間の距離、レイアウトの自由度を高めている。(図-2)

④屋外工程の成立;醸造と貯酒の工程は主に室内で行われているが、7 社が屋外タンクを併設している。つまり、建築を用いずに設備だけで行うことが可能になっている。 ⑤干場の消失;現在木製の酒具はほとんど見られず、鋼鉄製のものが使われている。木製の酒具は使用後に洗浄、乾燥の処理を行うための蔵前である干場が設けられていたが、現在では干場は必要とされない。

4. 酒蔵の変容と現況

(1) 酒蔵の現況

①伝統型(4 蔵);小規模で工程配列が平面的な酒蔵で、

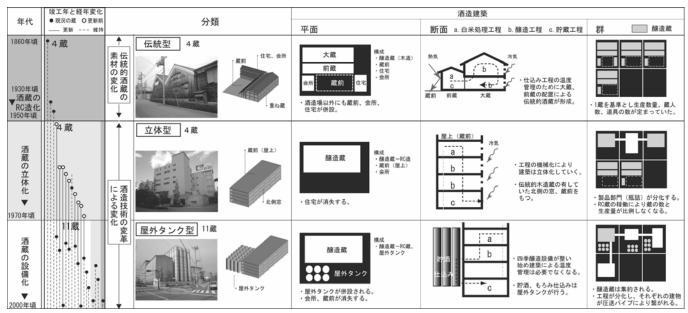


図-3 酒蔵建築の変容過程

冬季醸造で寒気を取り込む風土的な醸造を行い、住宅や 蔵前を残す伝統的な酒蔵である。内1蔵は平面的工程配 列であるが震災後に建てられ、四季醸造を行っている。

②立体型 (4 蔵);立体的な工程配列がそのまま酒蔵の構成に現れ、RC 造による立体蔵になっている。

③屋外タンク型 (11 蔵); RC 造や S 造の立体蔵に屋外タンクを設置しているものである。

(2) 酒蔵の変容

①酒蔵の RC 造化;酒造技術の変革が始まる以前に竣工された酒蔵は3蔵あり、木造酒蔵1蔵と昭和初期から RC 造化された2蔵がある。この頃の RC 造酒蔵は、木造酒蔵と同様に酒造工程の配列が平面的に行われ、冬季醸造により風土的な造りを継承している。

②酒蔵の立体化;生産量の拡大に対応するために面積効率を追求し、酒蔵は立体化が望まれ酒造技術が変革され、立体的な工程配列が可能となった。1963 年灘で初めての四季醸造設備を伴う立体蔵ができる。しかし、この頃建てられた10 蔵中7 蔵が、伝統的木造酒蔵の特徴である北側窓や、屋上部に干場を設けていることからも分かるように、完全に機械化されていくための設備機器は整ってはいない。

③酒蔵の設備化;1970年頃以降屋外タンクに表される設備機器が強化されていく。屋外タンクを併設する酒蔵は11蔵あるが、9蔵が1970年頃までに建てられた立体蔵で、後に屋外タンクを設置している。酒蔵は醸造、貯酒の温度管理をいかに行うかによって成立していたが、現在では冷暖房設備が整い、現在ではほとんどの蔵が北側窓を設けていない。つまり、新しい酒蔵を建設するのではなく、生産施設として設備機器の更新を行っている。

5. 酒蔵の和風意匠化および観光化

現況の酒蔵は伝統的木造酒蔵との差異が大きくなった ため以下のようなことが見られる。

①酒蔵の和風意匠化

酒蔵は、近年伝統的木造酒蔵の和風意匠を纏うことが 多く見られる。白壁、杉板をイメージさせるものや、立 体型のものに外壁塗装を加え和風酒蔵に変える例もある。

②酒蔵の観光化

酒造会社では、資料館、記念館、販売、飲食、多目的ホールなど多岐にわたり様々な観光施設を設けている。これらは観光客に対してだけではなく、飲食や多目的ホールなどは地域住民に対して開かれたものであり、その建設手法は損壊した伝統的酒蔵を復元したもの、全国から古材を収集し建設したもの、伝統的木造酒蔵の和風意匠をまね新建材で建設したもの、既存建物を改装し販売や飲食を組み込むものが見られる。他にも昔は使っていた煙突や井戸を修景し設置するなど趣向を凝らしている。

6. まとめ

伝統的木造酒蔵は、灘五郷の地域風土性をもとに酒造と建築が密接に関係づけられていた。1960年頃の酒造技術の変革により、酒蔵建築はRC造で立体化し設備機器を包む建築としてその役割を変えてきている。それ故、他の工場群と差異がなくなることを打破するために、酒蔵の和風意匠化および観光化への動きが見られる。

《**謝辞》**本研究を進めるにあたり、寺岡武彦氏をはじめ各酒造会社の方々には、仕込みのお忙しい時期に快く調査に協力していただいた上、貴重なお話を頂きました。ここに心より感謝の意を表します。 《参考文献》

- ・柚木学(1987)「酒造りの歴史」 雄山閣出版
- ・神戸市教育委員会編(1981)「酒のふるさと・灘の酒蔵」 神戸市 《**補注》**

(I) ヒデリング調査の結果、震災前は多くの蔵元で木造蔵は使っていなかったという回答が得られた。

^{*}株式会社コンパス建築工房

^{**}関西大学工学部建築学科

^{***}浅井謙建築研究所株式会社

^{*} Compas Architects Co.,Ltd

^{**} Kansai University

^{***} Asai Ken Architectural Research Inc.

灘五郷および伏見における輸送手段の変化と酒造空間

酒造空間研究 その2

灘五郷 伏見 酒造空間

水辺輸送手段

正会員 〇木下 光* 同 前谷 吉伸** 同 丸茂 弘幸* 同 東野 友信***

<u>1. はじ</u>めに

兵庫県・灘五郷や京都市・伏見は、現在まで我が国随一の銘醸地として酒蔵が密集し続けている。本稿では、酒造空間の形成後、明治中期から起こった輸送手段の変化によって、他の地域ではほとんど衰退している(1)のに対し、今日でも密集を維持し続けている酒造空間の変容について、両地域で比較しながら明らかにしていく。

2. 酒造空間の形成と水辺空間(2)

①難五郷(攤地区、西宮地区): 江戸中期以降、酒造地として新しく台頭した灘五郷は、海岸線に酒造地帯を形成した。その立地的要因としては、特に水辺空間との密接な関係がある。(表-1、図-1)主要航海路であった瀬戸内海に面した広大な海岸部に酒造用地を確保でき、海運の便の良さから、酒造りに必要な物資が容易に安価に入手できた。加えて、大量の酒を江戸だけでなく全国航路で安価に出荷できたことがある。一方素材的要因としては、特に宮水(3)が有名で、西宮郷のある一帯で湧出する井戸水を樽詰し灘五郷全域に運搬すのにもこの水運が利用されていた。また図-2 左絵図のように各酒蔵の前まで舟寄せできるようになっていた。

表-1 酒造空間の形成発展要因

次·I 但但空间心心似光成安囚						
灘五郷			Г	伏見(伏見地区)		
	立地的要因(自然条件)	素材的要因	Г	立地的要因	素材的要因	
ak an	海岸線に形成	宮水(井戸水)		河川・運河沿いに形成	伏水(井戸水)	
水辺 空間	兵庫津・大坂に近いため、	播州米(酒米)		港町、宿場町での消費地立地	近江の酒米	
	水運により物資が集まりやすい	吉野杉の香り	辺	高瀬川の開削による	京の底冷え	
		丹波杜氏の技量	空			
	水車精米の開発と導入	六甲の寒気	間			
		摂海の湿気	ட	米などの物資が得やすかった		
瀬戸内部路	カ州米 国際	(本事用来)		高祖 京都	宇治川	

図-1 灘五郷、伏見の形成期の酒造空間と水辺空間



図-2 水辺に密接する酒造空間

②伏見地区;江戸初期、洛外の酒として酒造業が盛んになった伏見は、運河沿いに酒造地帯を形成した。その立地的要因として、高瀬川運河の開拓により伏見が京と大坂をつなぐ内陸の港湾都市となり、物資の中継地になったことが挙げられる。図-1 のように、酒米や薪などの物資の搬入、酒樽の搬出が行いやすく、淀川や高瀬川を通して販路の拡大が行いやすいように、町の内部まで掘られた屈折した濠川運河沿いに各酒蔵が立地した。

このように船舶輸送を行いやすい密接した水辺空間として、運河沿いに立地した伏見の方が早く形成されたのに対し、灘五郷は大阪湾に面し消費地である江戸への輸送に有利であったため伏見よりも早く発展期を迎えた。

3. 輸送手段の変化による酒造空間の変容

(1) 輸送手段の変化

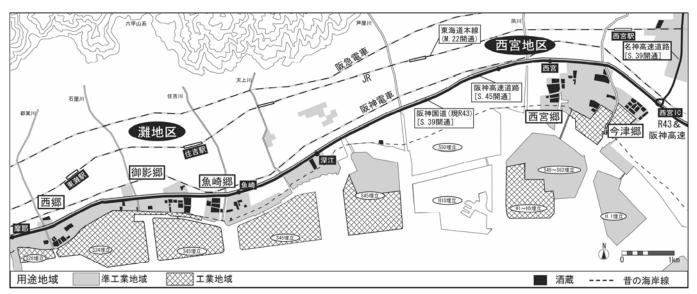
船舶輸送は、安価で早く全国各地への輸送がしやすい 鉄道という新たな輸送手段に取って代わられ、徐々に衰 退していく。次いで、鉄道は昭和初期からトラック輸送 に徐々に取って代わられ、戦後高速道路開通により更な る販路拡大が図られ、ほぼ全てが移行していく。

①攤五郷(攤地区、西宮地区): 灘五郷では、酒造地帯と平行するように明治 22 年東海道線が全通するが、(図-3) 水路の利を活かし大正期まで船舶輸送と並行して行っていた。西宮地区の西宮酒造では、大正 2 年には約 90%が船舶輸送で行っていたが、大正 14 年に全面汽車輸送に切り替えている。それにより、自家用車や大八車等により最寄りの各駅に運ばれた。戦後になってトラック輸送を行う酒造会社が現れ、名神高速、阪神国道、阪神高速が開通したことにより輸送手段はほぼ完全に変化した。

②伏見地区:明治 29 年奈良鉄道 (現JR奈良線)の開通により (図-4)、全国各地の消費地へと販路拡大を図った。 伏見地区の月桂冠では、明治 25 年より京都駅より東海道線を利用して鉄道輸送を開始し、同 33 年に 50%を突破、同 35 年にはほぼ全量を輸送している。また、図-4 のように国道 1 号線、名神高速が開通したことにより輸送によってより利便性の高いトラック輸送へと変化した。

(2) 酒造空間の変容

①難五郷 (灘地区、西宮地区): 船によって行われていた 宮水の輸送は、鉄道輸送期までは残っていたが、トラックを用いるようになったため、昭和 22 年宮水運搬船もその姿を消し、その役割を終えた。このような状況から阪神間の海岸線は、図-3 に示すように昭和 28 年以降西から 埋め立てられ工業地域へと変貌していった。一方、鉄道



灘五郷 (灘地区、西宮地区) の用途地域と酒造用地の分布図 図-3

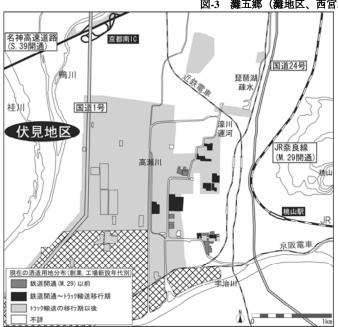


図-4 伏見地区の用途地域と酒造用地の分布図

や道路が、図-3 のように酒造地帯と平行してすぐ近くに 建設されたことにより、酒造空間は場所を変えずに更新 が行われた。

②伏見地区:写真-1 では、左の明治 中期の写真では水 辺に対して船着き 場として開いてい



写真-1 変容する水辺空間

るが、右の 2004 年の写真では護岸整備がなされている。 物流の拠点であった伏見港も、トラック輸送により昭和 37 年淀川の舟運がなくなり埋め立てられ、水辺空間とほ ぼその関係性を失っていった。一方、現在ある酒造会社 のうち鉄道開通以前創業の酒造会社は 2 社しかなく、逆

にその後 26 社が創業しているように、鉄道輸送が伏見の 酒造業を大きく発展させた。これは桃山駅が酒造地帯と 近いところにできたためである。鉄道輸送期までは運河 沿いに立地していたものが、図-4 に示すように、徐々に 水辺とは離れて立地し始めていき、トラック輸送が主流 になると、酒造用地を国道1号線および名神高速道路京 都南 IC に距離的に近い高瀬川以西に移転させていった⁽⁴⁾。

4. まとめ

①灘五郷及び伏見の酒造空間は、輸送手段としての水辺 空間、つまり灘五郷は海岸線に、伏見は運河沿いに立地 成立し、酒蔵の密集する独自の空間を形成してきた。

②輸送手段の変化により、海岸線の埋め立てや護岸整備、 もしくは酒造用地の移転が行われた。鉄道輸送は伏見が 酒造地として飛躍的な発展を可能にした。一方トラック 輸送への変化により、場所を変えずに灘五郷の酒造空間 は更新され、対照的に伏見では新市街地に移転した。対 照的であるものの酒蔵の密集する銘醸地としてあり続け たのは、駅や I.C が近いところにつくられ、その変化に対 応しやすい地理的条件に恵まれたためである。

- 《参考文献》
 ・柚木学(1987)「酒造りの歴史」 雄山閣出版
 ・柚木学共著(1983)「灘の酒博物館」 講談社
 ・伏見酒造組合編・発行(2001)「伏見酒造組合 125 年史」
 ・神戸市教育委員会編(2001)「沢の鶴大石蔵発掘調査資料」
 ・西宮酒造開(1989)「西宮酒造 100 年史」
 ・月桂冠壬三百六十年史(1999) 月桂冠株式会社
 ・西川幸治他(1985)「歴史的市街地の変容と現状〜伏見によ例的研究、その1〜その5」 日本建築学会大会学術講演 日本建築学会大会学術講演集
- 《補注》 (1) 鉄道輸送が発展する明治中期ま
- (1) 鉄道輸送が発展する明治中期まで、愛知県常滑、大阪府池田のほか、瀬戸内海岸部には銘醸地と呼ばれる地帯が多く存在したが、輸送手段の変化に対応できずにほとんどが衰退している。 (2) 灘五郷に関しては、経済学、歴史学的側面から詳細な研究をしている柚木学の知見を基に、伏見に関しては酒造組合史を参考にした。また、立地的要因および素材的要因の言葉の定義は、柚木学による。 (3) 宮水とは 1837 年に発見された西宮市内の特定の地下から汲み上げられている井戸水。宮水井戸を持たない酒造家に井水を売る水屋というこの地方独特の商売まで起こった。 (4) 伏見地区の酒造用地の移転に関しては、次稿で詳述する。

^{*}関西大学工学部建築学科

^{**}浅井謙建築研究所株式会社

^{***}株式会社コンパス建築工房

^{*}Kansai University

^{**}Asai Ken Architectural Research Inc.

^{***}Compas Architects Co.,Ltd

灘五郷および伏見における街区構成と土地利用の変化

酒造空間研究 その3

酒造空間

正会員 ○前谷 吉伸*

> 木下 光** 百

丸茂 弘幸** 同

東野 友信*** 同

十地利用 街区

1. はじめに

灘五郷

これまで述べた酒造建築の変化および輸送手段の変化 に加え、近年清酒の生産量は 1973 年をピークとして、減 少の一途を辿っており、廃転業する酒造会社が多く、特 に灘五郷では、阪神大震災によりその傾向は強い。(表-

伏見

1) 本稿では、第一に輸送手段 の変化への対応の中で生じた街 区構成の変化を明らかにし、次 に面積効率の高まりと廃転業に より生じた余剰空間がどのよう

表-1 酒造会社数の変化

	1965年	2004年		
灘地区	45	22(8)		
西宮地区	25	14(7)		
伏見地区	37	28(10)		
	()は集約・休業			

(酒造用地をもたない)

に利用されているのか、その実態を明らかにしていく。

2. 街区構成の変化

図-1 は酒造会社 2 社を事例として、その敷地の立地移 動状況と平面配置の変化を時代ごとに表したものである。 ①攤五郷 (灘地区、西宮地区);西宮地区 A 社では区画整 理により敷地が統合され酒造用地を拡大している。灘五 郷において、輸送手段の変化により酒造空間を更新させ たのは、区画整理が行われ、道路幅員を広くさせたり、 ひとつの街区が大きくなったり、街区構成が変化させら れたことによるものである。それに伴い敷地が分断され

> たところも見られ、圧送パイ プを用いて対応している。



写真-1 分割された酒造用地

②伏見地区:灘五郷と異なり、 伏見は城下町としての性格も 残しており、旧市街地の街区 構成を変えることはなく、 図-1 のようにこれまで旧市街 地にあった4社が田畑であっ た下鳥羽地区に移転にするこ とで酒造用地となって新市街 を構成し、街区構成が変化し た。

3. 酒造用地の利用変化

未利用になった酒造用地は、 その1で述べたように酒造空 間内に観光施設を設ける場合 以外に、不動産として賃貸、 もしくは売られる場合である。 図-2 は、1965 年 (伏見地区 は 1967 年) の酒造用地の現 在の利用状況を表したもので

①難地区;利用変化が起きた

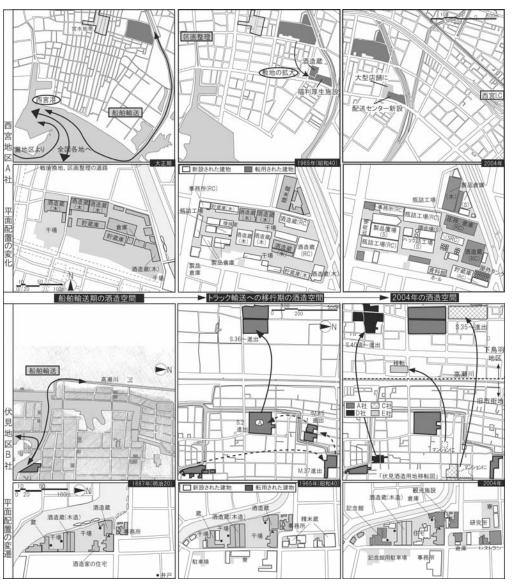


図-1 酒造空間変容図

のは 91 ヶ所であるが、25 ヶ所が集合住宅になっている他、15 ヶ所が倉庫、12 ヶ所が事務所ビル、7 ヶ所が大型店舗となって多いのが特徴である。これは酒造地のすぐ南の海岸線が埋め立てられ工場地帯となったため、工場地としての意味合いが強いためである。その他駐車場、酒類小売業、公園、小規模店舗、戸建住宅、工場、病院、ホテル、ゴルフ練習場がある。

②西宮地区;34ヶ所で利用変化が起きており、13ヶ所が 大型店舗で最も多く、8ヶ所が集合住宅となっている。こ れは住宅地化が進んでいるためである。その他駐車場、 酒類小売業、公園、小規模店舗、事務所ビル、倉庫、工 場がある。

③伏見地区;移転による跡地が多く 70 ヶ所で利用変化が起きている。そのうち 27 ヶ所が集合住宅であり、13 ヶ所が駐車場、5 ヶ所が大型店舗である。これは旧市街地の街区構成が変化しなかったことにより、灘五郷のように商工業地とはならず、住宅地としての意味合いが強いためである。加えて酒造跡地を分割した戸建住宅が 9 ヶ所もあるのは特徴的である。その他テナントビル、公民館、幼稚園、小規模店舗、公園がある。

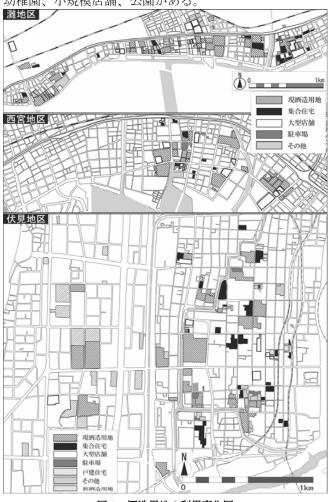


図-2 酒造用地の利用変化図

このように酒造用地の利用変化起こっているが、用途に関わらず、商業建築や工場に加えて風俗施設、遊戯施設など多種多様なものが建設されているのは、昭和 43 年に施工された都市計画法による用途地域指定によりこれらの地区はほぼ全て準工業地域に指定されていることに起因している。この地域は「主として環境の悪化をもたらすおそれのない工業の利便を増進するため定める地域」と定められ、事実上ほぼあらゆる建築物を建設できる。また特別工業地区の指定を受けていない。地域ごとにまちづくり協定が定めているものの、景観の規制だけに止まっているため、土地利用のコントロールまではできていない。





写真-2 酒蔵を模した大型店舗(左)と 駐輪場および酒蔵跡地のマンション(右)

4. まとめ

①灘五郷においては、輸送手段の変化の中で、区画整理が行われ、道路幅員を広くさせたり、ひとつの街区が大きくなったりして、街区構成が変化させられた。一方伏見では、田畑であった下鳥羽地区が、移転により酒造用地となって新市街を構成し、街区構成が変化した。

②酒造用地が利用転換なされた各地区では、集合住宅が多いという共通点をもち住宅地へと変貌していることが分かる。一方で細かい違いも見られ、灘地区では倉庫や事務所が多く工業地としての意味合いが強い。西宮地区では大型店舗が多く商業地としての意味合いが強い。伏見地区は、街区が変わらない旧市街地で数多く利用変化が起こり、最も住宅地としての意味合いが強くなっている。

③利用変化が起こり多種多様なものが建設されているが、 酒造地帯のほとんどが規制の緩い準工業地域にあるが故、 景観規制のみのまちづくり協定ではその建築物の種類に まで規制できず、土地利用のコントロールまではできて いない。

《参考文献》

- · 月桂冠三百六十年史(1999) 月桂冠株式会社
- ・西宮酒造株式会社社史編纂室 (1989) 「西宮酒造 100 年史」 ・神戸市教育委員会編 (1981)「酒のふるさと・灘の酒蔵」 神戸
- ・黒田龍二 (1999)「灘の酒蔵地区」レポート、(日本建築学会編 「阪神・淡路大震災調査報告・建築編 10」 P389~P395)

^{*}浅井謙建築研究所株式会社

^{**}関西大学工学部建築学科

^{***}株式会社コンパス建築工房

^{*} Asai Ken Architectural Research Inc.

^{**} Kansai University

^{***}Compas Architects Co.,Ltd